
天空飛翔オラシオン

桐原蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空飛翔オラシオン

【Zコード】

N2797D

【作者名】

桐原蒼月

【あらすじ】

統一宇宙歴200年。宇宙移民区の人々は、地球統一機構に宣戦を布告。少年達は、愛機と共に戦場を駆け巡る。

プロローグ（前書き）

初めまして、桐原蒼月です。
この作品が僕の最初の作品です。まだまだ未熟な点も多いでしょう
が、宜しくお願ひします。

プロローグ

統一宇宙歴2000年。

人類が宇宙での生活も始めるようになつて2世紀。

統一宇宙歴2000年8月18日、宇宙移民区に住む人々が地球統一機構の実質的な支配からの独立へ向けての協定を結び、独立連盟を設立、その3日後、宇宙移民区に対して圧政を行う地球統一機構に對して宣戦を布告。

志氣の高い兵士と、機動兵器スレイブ・フレームSFを用いて、たつたの3ヶ月で、7つあつた地球統一機構の宇宙拠点の内、第1拠点、第2拠点、第3拠点、第4拠点の4つを制圧した。

スレイブ・フレームとは、全長約8メートルの機動兵器で、リフターモードによる高い機動性能が特徴である。

無論、地球軍もSFを所有していたが、独立連盟軍のSFは地球軍のそれよりも高性能であった。

宇宙拠点を占拠された地球軍は、独立連盟軍の進行を防ぎつつ、拠点奪還の機会をうかがっていた。

開戦から半年が経つた時、この物語は始まる。

プロローグ（後書き）

次回からは本編が始まります。

第一話 三人のパイロット（前書き）

本編の始まりです。

第一話　三人のパイロット

地球軍ニューヨーク基地。

この基地に所属するSFパイロットである入江涼中尉、マーティン・ラスウェル中尉、遙・ルビンシティン中尉の三名は訓練を終えて、休憩所で語り合っていた。

「こないだから噂になつてゐる、ウォーダン・エレクトロニクスの新型SFのテストパイロット誰だろうな？」

ショートの黒髪に鳶色の瞳の少年、入江涼が一人に問いかける。「ベテランの人を選出するんぢやないか？」

ショートの茶髪に青い瞳の少年、マーティン・ラスウェルが答える。「新型SFは高価なものだし、信用の置ける人間に預けられるでしょうね」

ロングの黒髪に真紅の瞳の少女、遙・ルビンシティンが答える。「マーティも遙も夢がないね。乗りたいとは思わないのか？」

「思わないね」

「同感」

「じゃあ、地球軍の今度の宇宙拠点奪還作戦はいつになると思ひ？」「半月後ぐらいじゃないかな？」

「仮に拠点奪還作戦があつた所で、私達の任務は、またこのニューヨーク基地の防衛でしょう」

過去にも地球軍は三回、宇宙拠点奪還作戦を実行していたが、その全てに失敗していた。そして、三回共、涼達の仕事は通常通りニューヨーク基地の防衛だった。

だが、涼は先輩達が戦つている中、ただ見ているだけなのは辛かつた。

そしてその思いは、マーティと遙も同じだった。

基地から放送が入ってきた。

「入江涼中尉、マーティン・ラスウェル中尉、遙・ルビンシティン

中尉、司令室まで来て下さい」

「何だらな？」

司令に呼び出されるような覚えは涼達にはない。一体何の話しだろうと思いながら、涼達は司令室に向かった。

司令室に入ると、50歳程度の司令が三人を待っていた。

「君達に転属の命令だ。君達は8日後ここに寄港するウォーダン・エレクトロニクスの新造艦、如月に搭乗、同時に如月と共に運ばれる新型SFを受領、地球軍の宇宙拠点奪還作戦への参加を命ずる」

「了解しましたが、何故私達のですか？」

遙が質問する。

「ベテランのパイロットは既に作戦部隊に組み込まれていて、動かせない。動かせる人間の中で一番優秀だったのが君達だった」

それが司令の答えだった。

「作戦の詳細は？」

今度はマーティが聞いた。

「まず、一週間で新型機に慣れて貰う。その後、宇宙へ向かい、地球軍と合流。その後の作戦についての詳細は、現地で伝えられる。」「了解」

「たつたの一週間で新型機に慣れる、というのはかなり厳しいですね。もう少し操縦に慣れる為の時間を貰えませんか？」

涼が要望する。

「作戦開始まで20日間しかない。ぎりぎりのスケジュールなので、これ以上は時間を割く事は出来ない。機体性能についての資料を渡すので誰がどの機体に乗るかを話しあっておいてくれ。」

機体性能についての資料を受け取った時、涼はこれから忙しくなるな、とふと思つた。

第一話 三人のパイロット（後書き）

次回は如月の艦長の登場です。

第一話 軍人として

地球軍第6宇宙拠点。

ここでの経理部部長、天本隆一は事務書類の処理をしていた。彼は2年前までは艦長職についていたが上層部とのトラブルで今 の職に転属させられていた。

それ以来、今の階級である中佐のまま、異動も昇進もなく、この職務を2年間続けていた。

天本は42歳だがその鳶色の瞳は未だに強い意志を帶びており、黒色の頭髪には一本の白髪も見られない。

最後の書類の処理を済ませたとき、事務官の女性が報告に来た。

「天本中佐、面会を求める方が来ております」

「誰だ？」

「地球軍本部作戦部の山吹正樹大佐からです。客人室でお待ちです」「分かった。すぐに行く」

客人室では天本の同期の出世頭である山吹正樹大佐が待っていた。

「遅くなつて申し訳ありません。山吹大佐」

「気にしなくて良い。しかし、上もつまらない事をするな、せつかくの実力を無駄にして……」

「どのような内容の業務であれ、自分は自分の仕事を全うするのみです」

天本はそう答えたが、やはり戦艦の艦長職に未練はあるし、懐かしくなるときは度々ある。

「天本中佐、やはりまだ艦長職が懐かしいか？」

まるで自分の心理を見透かされたような質問だつた。

「はい。しかし先ほども申したように、自分は自分の今の職務を全

うするのみです」

そう答えた天本の返事を山吹は予想しているようだった。そして山吹はこう言葉を続けた。

「そうゆう貴官だからこそ、任せたい任務がある。いつもよりも、厳格な顔つきとなつた山吹を見て、天本はこれから告げられる任務内容が重大なものだと感じた。

「転属命令だ。天本中佐、只今をもつて、地球軍第6宇宙拠点経理部部長の任を解く。ユーロポートへ赴き、現在、ウォーダン・エレクトロニクスがユーロポートにて建造中の新造艦如月を受領、同艦の艦長を命ずる。その後はニューヨーク基地へ向かい、そこで如月に搭載する、新型SFのパイロットと合流。ニューヨーク基地で如月の補給を済ませた後、宇宙へ向かい、地球軍の宇宙拠点奪還作戦に参加せよ」

それが山吹の口から告げられた任務内容だつた。

その言葉を聞いた天本は、何故自分なのか、という疑問が脳裏をよぎつた。

「それで、何故自分なのですか？」

「他の者は、今動かす事ができんのだ。それに、私は貴官にこそ、如月を任せると値する技能があると確信している」

山吹はそう答えた

天本には、もう一つ聞きたいことがあった。

「山吹大佐が、自分を如月の艦長に推薦して下さったのですか？」

「そうだ。期待しているぞ。天本艦長」山吹はそいつて客人室から去つていった。

客人室から去つていく山吹を敬礼で見送りながら、天本は、同期の友の期待を裏切らないようにしよう、と心に誓つた。

第一話 軍人として（後書き）

次回は如月クルーの登場です。

第三話 クルー（前書き）

この回から如月のクルー達が登場します。

第三話 クルー

山吹から命令を受けた5日後、経理部部長の引き継ぎ作業を済ませた天本は、地球行きのシャトルに乗りながら、これから艦長として搭乗する如月のクルーの名簿を眺めていた。

山吹は、寄せ集めだが、能力のあるクルー達だと言っていた。

全てのクルーの名簿を軽く眺め、確かに信頼の置ける能力を持つていることを確かめ、地球に付くまでの残りの時間は眠る事にした。

地球上に付いて、ユーロポートの如月建造ドック内に入った天本は、そこに、懐かしい人がいるのに気が付いた。

「久しぶりだな。宮部副長」

「お久しぶりです。天本艦長」

天本に気付いた宮部勉は敬礼をした。

「三年ぶりですね」

宮部が言った。

宮部は士官学校時代の天本の一歳下の後輩である。

「懐かしいものだな。それで、現在の艦の建造の進み具合はどんな所だ？」

「もう、殆ど完成してます。後は艦長の最終チェックだけです。」

宮部はそう言つと、天本をブリッジまで案内した。

ブリッジは新造艦とは言え、基本的な構造は他の艦と殆ど変わりない。

「最終チェックをお願いします。」

宮部はそう言つと、天本にマスター・キーと火器管制キーを渡した。マスター・キーは戦艦を運用するためのコンピューターの起動キーである。

火器管制キーは戦艦の兵装をコントロールするために必要なキーで、マスター・キー、火器管制キー共に、戦艦が第三者に操られないようにするための安全装置である。

天本はマスター・キーを艦長席のコンソールしたの鍵穴に差し込み、コンピューターを起動させる。

パネルには『ネレウス』と表示された。これが如月に新型コンピューターの名前らしい。

艦の最終チェックを済ませた天本は、ブリッジの各クルーに命令を出していく。

「白川小尉、目的地までの航路の設定を頼む」

「了解」

ポニー・テールの青い髪の少女、白川美鈴から返事が帰つてくると同時にモニターに航路が設定される。彼女が如月の航海士である。

「ライエル中尉は敵襲に備えてレーダーの監視を続ける」

「了解」

ブロンドの髪のショートカットの男性、ステイーブ・ライエル観測士の返事が帰つてくる。

「アーヴィング小尉は敵襲に備えてブリッジで待機」

「了解」

ショートカットの焦げ茶色の髪の男性、スコット・アーヴィング火器管制官が返答する。

もつとも、地球は今は完全に地球軍の守りが固められており、残りの宇宙拠点も地球を守つてるので、恐らく宇宙に出るまで彼の仕事はないだろう。

「アレニウス中尉、全艦放送に接続してくれ」

「了解。全艦放送に接続します」

セミロングの赤い髪の女性、ジーナ・アレニウスが全艦放送に接続

する。

彼女は如月のオペレーターの仕事を担当する。

「これより本艦はニューヨーク基地へ向けて出航する。ニューヨーク基地到着までは第2戦闘配置で万が一の敵襲に備えろ」

天本がそう言い放つと同時に如月のエンジンが始動し、如月はニューヨーク基地への航路を進み始めた。

第四話 邂逅（かにじゆ）

「ニュー・ヨーク基地からの入港許可が下りました」
如月オペレーターのジーナが報告する。

如月がユーロポートからニュー・ヨーク基地へ向けて出航し、20時間、天本の予想通り敵襲もなく、予定通りにニュー・ヨーク基地に到着した。

「基地のドックに入つたら、総員休憩とする」

天本はそう言つと、休憩の為、艦長室に向かつて行つた。

如月がニュー・ヨーク基地のドックに入港した後、涼達三人は如月で運ばれてきた新型SFを見るため、如月の格納庫に足を運んでいた。
「さて、いよいよ対面だな」
性能については資料で確認しているが、やはり一度この目で見た方が良いと思つたのだ。

「どうせ明日から実際に乗つて訓練するんだから何も今日来ることないだろうに」

「訓練も大したことしないけどね」

時間が少ないので、SFの訓練内容は基本的な操縦訓練を中心に行うことになつていた。

しかも、機体の操縦方法は地球軍が採用するウォーダン・エレクトロニクス製の量産機、WSF-11アイオロスと変わりないので、大した苦労はしない筈だった。

「でも、戦場での相棒のことは詳しく知つておきたいしな」涼はそう言いながら、格納庫への道を歩き続けた。

格納庫では、これから涼達の戦場での相棒が待っていた。三人はそれぞれの搭乗機の前に向かう。

新型SFは三機とも資料でも見た通り、アイオロスよりも流線的なデザインをしていた。

涼は右の機体に向かう。

「これから宜しく頼むぜ、オラシオン」

涼の機体はWNNSF-01オラシオン、接近戦を得意とする機体である。

「これから宜しく、シグルス」

マーティの機体はWNNSF-02シグルス、中距離戦を得意とする機体である。

「期待してると、アタランテ」

遙の機体はWNNSF-03アタランテ、遠距離からの射撃戦を得意とする機体である。

各々が自分の乗る機体を確認していると、メカニックの村上和哉が声をかけてきた。

「艦長が呼んでもましたよー！」

「今どちらに？」

「如月の艦長室にいらっしゃいます。挨拶がしたいのだそうです」

「あいよ。すぐに行くわ」

涼がそう言つと、三人は、走りだした。

「入江涼中尉他三名到着しました」

艦長室のドアをノックする。

「入れ」

その返事を聞き、涼達は入室する。

「如月艦長の天本隆一だ。階級は中佐だ。宜しくな」

「入江涼中尉です。宜しくお願ひします」

「マーティン・ラスウェル中尉です。宜しくお願ひします」

「遥・ルビンシティン。階級は中尉です。宜しくお願ひします」

これが、天本隆一と三人のSFパイロットの邂逅だった。

第四話 邂逅（かこいり）（後書き）

次回からは後書きで登場人物やSFの紹介をしていくつもり입니다。

第五話 如月の一日

新型SFの搭乗訓練が始まつて2日。

涼達も大分新型SFの操縦方法に慣れて来た頃だつた。今日の分の訓練を終えた後、涼達は人手不足のため、如月の手伝いをすることになつていた。

「何で俺達が手伝わなきやならないんだ？」

「最近はどこも忙しくて人手不足なんだ。しかたないよ」

この日は、涼が格納庫、マーティが医務室、遙はブリッジをそれぞれ手伝うことになつっていた。

「それじゃ、また後で」

遙がそう言つと、三人はそれぞれの手伝い先に向かつて行つた。

「涼、そこの新型SFの資料ファイル取つてくれ！」

格納庫の機械の音量に負けないぐらいの大声で技術長の長月哲也大尉が叫ぶ。

涼がそのファイルを渡した後、休憩をとつていると、

「ご苦労様ですね、入江中尉」

技術科員の村上和哉小尉が声をかけてきた。

「お前ここ担当だつたのか」

涼が言つ。この前呼びに来たときは、どこの担当だつたのか分からなかつたのだ。

「村上和哉小尉です。宜しくお願ひします

「入江涼、階級は中尉。こちらこそ宜しく。技術科は今忙しいのか

？」

「はい、最近は見知らぬ機械が3機も入つて來たので大分忙しいですね、技術科は」

「新型SFの事か？乗る側としては今までの機体と操縦系はそんなに変わつてないようを感じるが」

「パイロットのことと考えて操縦系は確かにそうなつてますが、その他の部分は大きく異なつてきてます。それの整備方法の習得で大分忙しいですね。でも、自分達の担当の機体で分からぬ所があるのはパイロット達に失礼ですしね」

その言葉を聞いた涼はこの艦の技術科の連中には安心して自分達の愛機を任せられると確信した。

マークは医務室ではなく、ニューヨーク基地の倉庫にいた。
荷物の運び出しをして欲しいと伝えられていたのだ。

「どんな人だろな？」

そうつぶやいて待つていると、

「あら、あなたがお手伝いの人？」

その声の方にマークが向かうと、そこには栗色のロングヘアの女性がいた。服装は襟元のボタンと第一ボタンのはだけたワイシャツにロングスカート、ワイシャツの上に着ていて、白衣の襟には中尉の階級章が縫い付けてある。年はマークよりも幾つか上だろう。どうやら彼女が如月の軍医らしい。

「私は如月の軍医、フェリア・テティス中尉。戦艦での仕事は始めてなのでこれから宜しくね」

「マークイン・ラスウェル。階級は中尉。こちらこそ宜しくお願ひします。それで、手伝つて欲しい仕事というのは？」

その言葉を聞いたフェリアは倉庫の片隅にある薬品の入った木箱を指差し、

「あれを運んで欲しいのよ」

「分かりました」

マークはそう言つと、木箱を持ち上げる。

フェリアも小さい木箱を持ち上げて、一人は一緒に如月の医務室へと歩き出した。

「ありがとね。私一人じゃあの木箱運べないから。」

如月の通路を歩きながらフェリアがマーティに声をかける。
「役に立て何よりです」

マーティはそう返事をすると、一人は如月の医務室の前に到着した。

「ありがとうございます。マーティ君」

「ええ、それじゃ」

フェリアの言葉に少し胸が暖かくなるのを感じながら、マーティは自室へと向かっていった。

「遥さん、如月の全火器の作動ランプどうなつてますか？」

火器管制システムの動作確認作業をしながらスコットが遙に質問する。

その言葉を聞いた遙は火器の作動状況を確認する。

「ミサイル、レールガン、CIWS（近接防御火器システム）すべて問題ない」

そう返事をすると、次は美鈴から頼まれている友軍との合流ポイントまでのルートの安全性の確認に取りかかった。

「遙さん、手際良いですね」

美鈴が話し掛けると、

「誰でも普通にこれぐらいのことはできる。あなたの選んだルートに問題はなかつたわよ」

突き放したようにも聞こえる遙の言葉に美鈴がどう返事をしようか戸惑っていると、

「お前もう少し優しくしてやれよ

「悪意がないのは判るけどね」

観測員のステイーブとオペレーターのジーナが遙に話し掛けた。

私にはそんな言葉は掛けられない。

そう思いながら遙は仕事を続けた。

だが、ステイーブとジーナの言葉が仕事中ずっと胸に響いていた。

第五話 如月の一日（後書き）

人物紹介（フェザー小隊）

入江涼

WNSF-01 オラシオンパイロット。中尉。19歳。

マーティン・ラスウェル

WNSF-02 シグナルスペイロット。中尉。19歳。

遥・ルビンシティン

WNSF-03 アタランテパイロット。中尉。19歳。

第六話 初陣

ニューヨーク基地でのSFパイロットの操縦訓練と如月の補給作業が始まって七日目。

遂に如月が宇宙に向かう日がやって来た。

如月は今日の正午、宇宙に向かつ。

ちなみに戦艦は自力での大気圏突破及び、大気圏離脱を行うことが出来る。

涼達は今までお世話になったニューヨーク基地の人々に別れの挨拶を済ませていた。

「頑張れよ」

「無理するな」

「また会いましょう」

そのような言葉を多くの人々から受け取つた涼達はその言葉を受け取つた喜びを噛み締めて、ニューヨーク基地に別れを告げる事にした。

正午、如月はニューヨーク基地から地球軍第5宇宙拠点に向けて出発した。

他の部隊もそこに集合しているはずである。

宇宙に出て如月が目的地に向けて航海を続けていると、

「敵SF反応確認！その数15機！現在、友軍が交戦中！3機がこちらへ向かつて来ます！識別は全てJ-SF-109テセウスです！」

観測員のステイ一ブが大きな声を上げて報告する。

「やはり、待ち構えられていたか。総員第一戦闘配置！対SF戦準備！こちらもSFを発進させる！フェザー小隊、発進準備！」

天本が次々と指示を出していく。

「こちらフェザー1、入江涼。発進準備出来てます」

「フェザー2、マーティン・ラスウェル。いつでも発進出来ます。」

「フェザー3、遥・ルビンシティン。発進準備完了」

フェザー小隊のメンバーからの返事が帰つて来る。

「まずはフェザー小隊が発進。その後本艦は後退、艦砲射撃でフェザー小隊を援護する。」

「了解」

フェザー小隊の三人から応答の返事が帰つて来る。

「フェザー小隊、発進して下さい。」

オペレーターのジーナが指示する。

「了解！ フェザー1、オラシオン発進するぜー。」

「フェザー2、シグルス発進します！」

「フェザー3、アタランテ発進する」

三機のSFが発進する。

「それじゃ行くぜ！ 一人とも！」

「OK！」

「了解」

二人から返事が帰つて来る。

同時にオラシオンとシグルスが敵SFへと向かう。アタランテは他の2機と違い、狙撃の為他の2機よりも敵SFと距離を置く。

3機のテセウスはオラシオンとシグルスに対し装備していた42mmマシンガンで攻撃を開始する。

「当たるか！」

涼はマシンガンを回避しつつ、57mmショットガンを構え、テセウスの一機に高速で近づき、至近距離から弾丸を打ち込む。被弾したテセウスが宇宙空間で音も無く爆散する。

「一機撃破だ。マーティ、そつちは？」

「大丈夫」

マーティはシグルスの手に格闘戦用のソードを持ち、陣形の乱れた2機のテセウスの片方に向かい、ソードでテセウスに斬り捨てる。

「2機目、撃破」

「最後の1機は私が仕留める」

シグルスが2機目を撃破すると同時に、遙の乗るアタランテが75mm狙撃用レールガンを構えて、最後の1機に狙いを定めて狙撃する。

弾丸が直撃して、最後のテセウスも撃破される。

「命中。撃破を確認」

「これでこっちに向かつて来た機体は全機撃破か。艦長、そちらはどうですか?」

涼が如月のブリッジで指揮を執る天本に通信を送る。

「こちらも損傷は軽微だ」

「友軍が敵機の内5機を撃破。残りの7機と交戦を続けています」

「よし、本艦は友軍の援護に向かう!」

天本が指示を出す。

「了解!」

ブリッジからクルー全員の応答が返つて来る。

「了解! こちらは先に援護に向かいます」

涼がフェザー小隊を代表して応答する。

フェザー小隊の3機は友軍の交戦地域に援護に向かつ。

「こちらは、独立遊撃艦如月艦長の天本隆一中佐。これより貴官らの援護に向かう」

天本が交戦中の部隊に通信を入れる。

「こちら、地球軍第5宇宙拠点第7防衛隊。貴官らの援護、感謝する」

交戦中の部隊からの返答が送られて来る。

彼らはどうやら第5宇宙拠点の防衛部隊らしい。

その間に、涼達は残りのテセウスを撃破するため、戦闘を再開していた。

まずは味方のアイオロスを包囲しつつ攻撃していた3機を遙が狙撃する。

1機には命中したが残りの2機には回避される。

「涼、マーク、任せた」

「了解」

マークは回避行動をとった2機の隙を狙つて37mmサブマシンガンで攻撃する。

直撃弾を受けた2機のテセウスも撃破される。

「任しどけ。遙」

涼はオラシオン専用の格闘戦闘ロングソードを手に取り、3機に近づき、斬りつける。

その間に友軍は残りの4機を撃破していた。

「全機の撃破を確認。周辺に敵影なし」

ステイーブが天本に報告する。

「目的地の第5宇宙拠点までの航路の再設定完了」

美鈴が天本に航路のデータを送信する。

「本艦の損傷箇所なし」

宮部が報告する。

「こちらフェザー1、フェザー小隊も3機共に損傷箇所なし」
涼が通信を入れる。

「よし。本艦はフェザー小隊の3機を回収後、第5宇宙拠点へ向かう。アレニウス中尉、フェザー小隊の各機に帰還命令を出せ」

「了解。フェザー小隊、帰還して下さい」

天本の命令を受けた後、ジーナがフェザー小隊の各機に通信を送る。
その通信を受けて、フェザー小隊の3機は如月に帰還した。

第七話 雷鳴作戦

如月のクルーとフューザー小隊にとつての初戦闘が終わり、如月は第5宇宙拠点に到着した。

「ご苦労だつたな。天本中佐」

第5宇宙拠点の拠点司令が艦から降りた天本に挨拶する。

彼は最初の宇宙拠点奪還作戦において、地球軍の現状を無視した作戦を提案し、それに反対した天本を左遷した張本人だつた。

「お出迎え感謝します」

天本は不快感を顔に出さないようにして返答をする。

「山吹大佐が作戦会議室で貴官の到着をお待ちだ」

拠点司令は天本の隠している不快感に気づいていないようだつた。

天本はそのまま拠点司令の顔を見ないようにして山吹の待つ作戦会議室に向かつた。

「天本中佐、ご苦労であった」

作戦会議室では、山吹が作戦の資料を整理していた。

「作戦の現状はどのような感じで？」

「一部の部隊の集結を読まっていた。おそらく敵も拠点の奪還を防ぐため、戦力を結集させているだろう」

「厳しい、といった所ですか？」

「そうだな、だが、こちらも前とは違い、戦力をより多く集結させている。さて、会議の始まる時間だ」

宇宙における時間はケンブリッジ標準時を用いる。

その時計は、今は作戦会議の開始時間を示していた。

他の部隊の指揮官も作戦会議室に入室して、作戦会議が始まつた。

作戦会議で山吹が説明したのは次のよつた内容であった。

部隊は分散させずに一つに集中させて、1つ1つ奪われた宇宙拠点を奪還するといつたものだつた。

「各部隊は友軍と連携を取りつつ、正面から敵部隊を撃破してくれ。また、拠点に多少の被害が出るのも仕方ないと上からの通達が出ている。拠点への攻撃も遠慮なく行つて貰つて大丈夫だ」

仮に多少の被害が出ても、敵に使われ続けるよりはマシということか、と天本が軍上層部の判断を推論していると、山吹からの指示が出てた。

「如月は、味方部隊の交戦中に別ルートで宇宙拠点の中核を叩いて貰う」

「了解しました」

「では、以降の本作戦の作戦名を雷鳴作戦とし、作戦決行は翌日の15時からだ。それでは、解散だ」

山吹のその言葉で会議は解散となつた。

如月のクルー達は艦が入港した後、宇宙拠点で休息を取ることになつた。

各クルー それぞれの判断による自由行動である。

それぞれの過ごし方は自室で映画を見る者や、親しい者とお茶にしたり、一緒に遊ぶ者、自室で明日に備えて眠る者等である。

「美鈴、みんなでお茶にしない？」

ジーナが美鈴に声をかける。

ステイーブとスコットも既に誘つてあつた。

「はい、是非。後、遙さんを誘いたいんですけど……」

「遙は自室で作戦に備えて休息するつて言つてた。まったく、つれない奴よ」

ジーナが愚痴をこぼす。

美鈴はそんなジーナを不思議そうな目で見ていた。

「遥さんはきっと良い人ですよ」

「そつなんだろうけどさ……」

「ジーナ！早く行こうぜ！」

「あんまり待たせないで下さいよ！」

「ほら、美鈴行こ」

ステイーブの声を聞いて美鈴とジーナは一人の方へと向かつた。

翌日、作戦の開始時刻となつた。

地球軍の部隊はまず第4宇宙拠点の奪還に乗り出した。

如月は友軍の作戦開始より、少し遅れて作戦を開始する予定である

「こちら作戦本部山吹、如月も作戦を開始してくれ」

「了解しました。各クルー 戰闘準備。 フェザー小隊各機も発進の準備を整えろ」

天本の指示で各クルーがそれぞれの担当の仕事を開始する。

「フェザー小隊全機、発進準備完了」

「よし、両舷全速前進、発進ポイントに到達後、SFを発進させ、その後友軍と合流して艦砲射撃で宇宙拠点を攻撃する。周辺海域の警戒を怠るな」

「両舷全速前進、所定ポイントへ向かいます」

美鈴が最短の航路を設定し、如月をSFの発進ポイントへと進めていく。

「発進ポイント到達まで15秒前」

ステイーブが発進ポイント到達までの予定時間を報告する。

「10秒前、9、8、7、6、5秒前、4、3、2、1、発進ポイント、到達しました！」

「フェザー小隊各機、発進して下さい」

「了解！ フェザー1、 オラシオン発進するぜー。」

「フェザー2、 シグルス発進します！」

「フェザー3、 アタランテ発進する」

3機のSFが如月から発進する。

如月は友軍と合流し、 友軍艦と艦砲射撃を開始する。

フェザー小隊の3機は、 敵SF部隊を挟み撃ちにする為に友軍SF部隊の交戦宙域に向かう。

「さあ、 行くぞ」

「OK」

「任せて」

フェザー小隊の3機は敵SF部隊に強襲を仕掛ける。

「敵機、 照準内に補足」

アタランテはレールガンを構えて、 奇襲により拳動の乱れた5機のテセウスの小隊に狙いを定める。

「攻撃開始」

レールガンから放たれた弾丸は2機のテセウスに命中する。

「隙あり！」

「もうつた」

オラシオンとシグルスはソードを構えてレールガンを回避した3機に格闘戦を仕掛ける。

「1機！」

オラシオンがロングソードを構えて真一文字にテセウスを斬りつける。

「2機！」

シグルスが袈裟切りでテセウスを斬りつける。

「3機！」

オラシオンとシグルスがコンビネーションで最後に残った小隊長機に斬りつける。

「マーティ、 遙、 次にかかるぞー！」

涼が2人に指示を出す。

「涼、待って」

遙が涼とマーティを呼び止める。

「新たな敵SF反応を確認。その数3機。適合するデータ無し。多

分敵の新型機と思われる」

「敵さんもこちらの作戦に対して準備してた訳か」

涼が呟く。

「敵増援の新型機から叩くぞ！さあ、行くぞ！2人共！」

「OK！」

「任せて！」

涼の指示でフェザー小隊は新型機との交戦準備に入った。

第七話 雷鳴作戦（後書き）

人物紹介（如月クルー）

天本 隆一

地球軍戦艦“如月”艦長。中佐。42歳。

宮部 勉

同艦副長。小佐。37歳。

ジーナ・アレニウス

同艦オペレーター。中尉。21歳。

白川 美鈴

同艦航海士。小尉。18歳。

スコット・アーヴィング

同艦火器管制官。小尉。18歳。

ステイーブ・ライエル。

同艦レーダー観測員。中尉。20歳。

長月 哲也

同艦技術長。大尉。32歳。

村上 和哉

同艦技術科員。小尉。18歳。

フェリア・テディス

同艦軍医。中尉。24歳。

第八話 謎の機体（前書き）

これからはペースを安定させて更新したいと思います。

第八話 謎の機体

戦場に表れた3機の新型機。

フェザー小隊の3機はその3機との交戦準備を開始した。

「……早い」

敵機の移動速度を確認した遙が呟く。

表れた3機は橙色系のカラー・リングであった。

涼達から見て、中央の1機は槍を持った近接戦闘特化型、右側の機体は各種兵装をバランス良く装備した万能型、左側の機体は最小限の武器のみを持つた高機動型と推測された。

それぞれ、R1、R2、R3のコードネームが作戦部より割り当てられた。

「遙、マーティ、バックアップを頼む！」

「OK！」

「任せて！」

二人が応答を返すと同時にフェザー小隊の3機は交戦を開始する。

「当たれ！」

シグルスがサブマシンガンでR2に攻撃する。

R2はそれを回避すると、右手をシグルスの方に向けて、内蔵していた攻撃用アンカーを射出する。

「ちつ！」

ギリギリでシグルスはSFの両手に付属しているハンドシールドで防御したが、右腕のハンドシールドが破損してしまった。

「マーティ、下がつて！」

アタランテがレールガンを構えR2に攻撃する。

だが、R2はそれを回避する。

しかも、R3がアタランテの後方に周り込んでいた。

「しました」

慌てながらも前方に動く事でR3のナイフを回避する。

回避した後、オラシオンがソードでR3に攻撃するが、回避された。

「遙、大丈夫か？」

涼がオラシオンから通信を入れる。

「何とかね」

「ひとつちも問題ない」

マーティからも応答が返ってくる。

だが、それと同時にR1が右からオラシオンに槍を構えて来た。

「涼！右！」

「分かつてる！」

オラシオンはソードでR1の槍を受け止める。

「危なかつた……。」

涼が一つ息をつく

「マーティ、遙、陣形を組み直そう。遙は後ろから援護射撃を、マーティは俺と格闘戦を仕掛けていくぞ」

「あいよ」

「ええ」

アタランテは後ろに下がりレールガンを、シグルスとオラシオンはソードを構える。

「行くぞ！」

「おうよー」

「ええ！」

アタランテが敵機を三機同時にロックし、動き回りつつレールガンを連射する。

三機はそれを回避していくが、レールガン連射の狙いは敵に命中させることではない。

「隙あり！」

R1が回避動作をとつた一瞬の隙をつき、オラシオンがR1に斬りつける。

R1は左手で防ぐが左手のシールドを破損させる事に成功した。

R1は右手のアンカーで攻撃するが、

「おつと」

オラシオンはそれをギリ、ギリながらも回避する。

「盾の借りだ！」

シグルスはR2に斬りつけ、R2の右手のシールドを破壊する。

R2はもう一度、左手から攻撃用アンカーで攻撃するが、

「同じ手を一度も食らうか！」

シグルスは攻撃用アンカーを切り落とす。

だが、R3がハンドガンでオラシオンに狙いを定める。

「ヤバ……」

涼が焦りを感じたが、

「させない！」

アタランテが狙撃した弾丸がR3のハンドガンを撃ち落とす。

「助かった、遙」

「気にしなくていい」

「よし、もう一回仕掛けるぞ」

フェザー小隊は陣形を組み直し、もう一度攻撃を仕掛けようとするが、交戦宙域の敵機が撤退していった。

「何だ？」

「フェザー1へ報告。地球軍が第4宇宙拠点の奪回に成功。一時如月に帰還して下さい。」

如月オペレーターのジーナからの通信が入ってきた。

如月のブリッジでは、新型コンピューター『ネレウス』による戦況の分析がなされていた。

「富部副長、敵はどのような行動をとると思う？」

「私の考えでは、宇宙連盟軍は第4拠点の防衛戦力を残りの拠点を集め、残りの宇宙拠点を防衛に出るか、兵力の一部を第4宇宙拠点の再獲得に回すかの2つに1つですね。」

「 そ、う、か、な、ら、本、艦、は、第、5、宇、宙、拠、点、に、一、時、帰、還、し、4、時、間、で、補、給、と、休、憩、を、済、ませ、た、後、残、り、の、拠、点、奪、回、作、戦、を、実、行、す、る。白、川、小、尉、本、艦、の、進、路、を、第、5、宇、宙、拠、点、へ、転、進、し、て、くれ、」

「 了、解、。フ、エ、ザ、ー、小、隊、を、收、容、後、第、5、宇、宙、拠、点、へ、向、か、い、ます、」

2分程してフェザー小隊が帰還した。

第九話 再出撃準備

第四宇宙拠点を奪還した地球軍は、残りの宇宙拠点も制圧すべく、疲弊の少ない部隊の一部はそのまま残りの宇宙拠点へと進軍、疲弊が出ていた残りの部隊は補給を受けた後、先に進軍した部隊と交代することになっていた。

如月の部隊は如月の拠点攻略に用いた弾薬類の補充の為、第五宇宙拠点へと向かうことになっていた。

「疲れた……」

如月内のSF格納庫の片隅で涼がぼやぐ。

背中を壁にもたれさせて、右手に雷鳴作戦の現状を記した資料を持ち、コーヒーのボトルを床に置き、やる気なさげにしている。

「はいはい」

遙が涼の言葉を軽くあしらう。

彼女はベンチに腰掛け、資料とマーティのコーヒーを横に置き、コーヒーを飲んでいる。

「遙、マーティはどう行つた？」

「シグルスのハンドシールドの交換を手伝つてゐる」

「ごめんな、シグルス」

マーティはシグルスのハンドシールドの交換を手伝いながら呟いた。
「ラスウェル中尉、残りの作業はこちでやるので、次の戦場に備えておいて下さい」

技術員の和哉がマーティに休憩を進めてくれた。

「頼むよ」

マーティは涼と遙が休憩している方に向かつた。

「相棒の修理は終わったか？」

「もう少しで終わる。残りは和哉さんに任せてきた。」

「そうか」

「マーティ」

遙が「一ヒーのボトルをマーティに渡す。

「ありがと」

如月のブリッジで天本は富部と共に地球軍本部から受け取ったレポートの内容を確認していた。

「敵軍は第四宇宙拠点の残存戦力を第一宇宙拠点に回しているらしいな」

天本が富部にレポートの確認をする。

「ええ。それに宇宙連盟軍の増援のSF空母と護衛艦隊の部隊が宇宙拠点にもう少しで到着すると、予測されます。」

「富部副長、我々はどういった手を打つべきだと思つ?」

「私としては地球軍の残りの宇宙拠点奪還作戦を遊撃で援護していくべきかと」「そうだな」

そこにオペレーターのジーナが地球軍本部からの通信を報告した。
「艦長、如月とフェザー小隊SFの補給、及び修理作業、全て終了したようです」

「よし、アレニウス中尉、全艦放送に繋いでくれ」

「了解、全艦放送に接続します」

ジーナが全艦放送に接続する。

「本艦は直ちに残りの第一、第一、第三宇宙拠点の奪還作戦を再開する。まずは第三宇宙拠点の奪還からだ!進軍を再開するぞ!総員、第一戦闘配備!」

「第四宇宙拠点を奪われたか」

宇宙連盟に奪われている第三宇宙拠点で R₁ JCSF-07 tip e Aボレアスのパイロット、エミール・ワイズ中尉が独立連盟軍からの通信を受け取り、愚痴をこぼした。

「連中も本気ということか」

R₂ JCSF-07 tip e Bザフュロスのパイロット、ジョンフリー・アーノルド中尉が答える。

「独立連盟軍からの命令は?」

R₃ JCSF-07 tip e Cノトスのパイロット、ダニエル・レイシー中尉がエミールに質問する。

「残りの宇宙拠点は死守しろとのことだ。」

「こここの宙域の奪取した宇宙拠点を防衛するよりも宇宙連盟本部の防衛をした方が良いと思うがな」ジェフリーが呟いた。

「宇宙連盟の上層部は地球に対して侵攻する為の足掛かりが欲しいのだろう」

エミールが答える。

「だが、連中も今回の作戦にはかなりの戦力を導入している。厳しくなるな、この戦いは……」

エミールが一人呟くと、

「ワイズ中尉、宇宙連盟本部からの命令が届きました。第一宇宙拠点の防衛につくよとにとの事です。」

宇宙連盟軍の通信士官がエミール達に報告した。

「了解した」

「御武運をお祈りします」

エミール達は第一宇宙拠点に向かうイストリア級SF空母に乗り込んだ。

「地球軍の新型SF？」宇宙連盟軍本部特務部隊、部隊長、里見純は宇宙連盟本部のオフィスで報告に来た女性士官に質問した。

宇宙連盟軍特務部隊は宇宙連盟本部直属の他の部隊とは別ルートで作戦を実行する部隊である。

主だった任務は、少數精銳のSF部隊による、遊撃が中心になつている。

「はい、なかなかの戦果を上げ初めているようですが
里見が報告書に目を通していると、

「失礼します」

特務部隊のエースSFパイロット、望月保が入室してきた。

「保か、少々厄介な敵が出てきた。ところで、妹さんはどうした？」

「唯は俺達が乗ることになるジュピター・インダストリーの新型SFの書類を受け取りについてます。俺はその報告でここに。ところで、厄介な敵と言うのは？」

「地球軍の連中も新型SFを配備したらしい。俺達の部隊で相手をする事になるかもな」

「失礼します。新型SFの資料を受け取つて来ました。」

そこにもう一人のエースSFパイロット、望月唯が入室してきた。

「『』苦労様。一人にはこれからその専用のSFが配備される事になる、期待しているぞ」

「任せて下さい」

「はい」

保と唯の二人が力強く返事をする。

「では、専用SFを受け取りに向かってくれ」

了解、と二人は声を揃えてオフィスを出ていった。

如月が第三宇宙拠点に進軍を開始してから一時間、味方の部隊とは

三十分前に合流し、そろそろ敵部隊との可能性が考えられる為、地球軍の部隊の間には緊張感が高まっていた。

「そろそろかな」

オラシオンのコックピットから涼がマーティと遙に声をかける。
「多分な」

マーティが答える。

「いきなり後ろからあの三機が来るかもね」

「遙、お前にしては珍しい冗談かも知んないが、演技でもない。何回もあれの相手はしたくないね」

「同感。私もあれの相手はしたくない」

「同じく」

三人がそんな会話をしていると

「フェザー小隊、敵部隊の接近を確認。発進して下さい」

「了解！ フェザー1、オラシオン発進するぜー！」

「フェザー2、シグルス発進します！」

「フェザー3、アタランテ発進する」

三機のSFが如月から発進する。

「さあ、行くぜ二人共！」

「OK！」

「任せて！」

フェザー小隊のSFは地球軍のSF、WSF-11アイオロスと共に宇宙連盟軍のSF、JSF-09セウスの部隊と戦闘を開始した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2797d/>

天空飛翔オラシオン

2010年11月18日03時20分発行